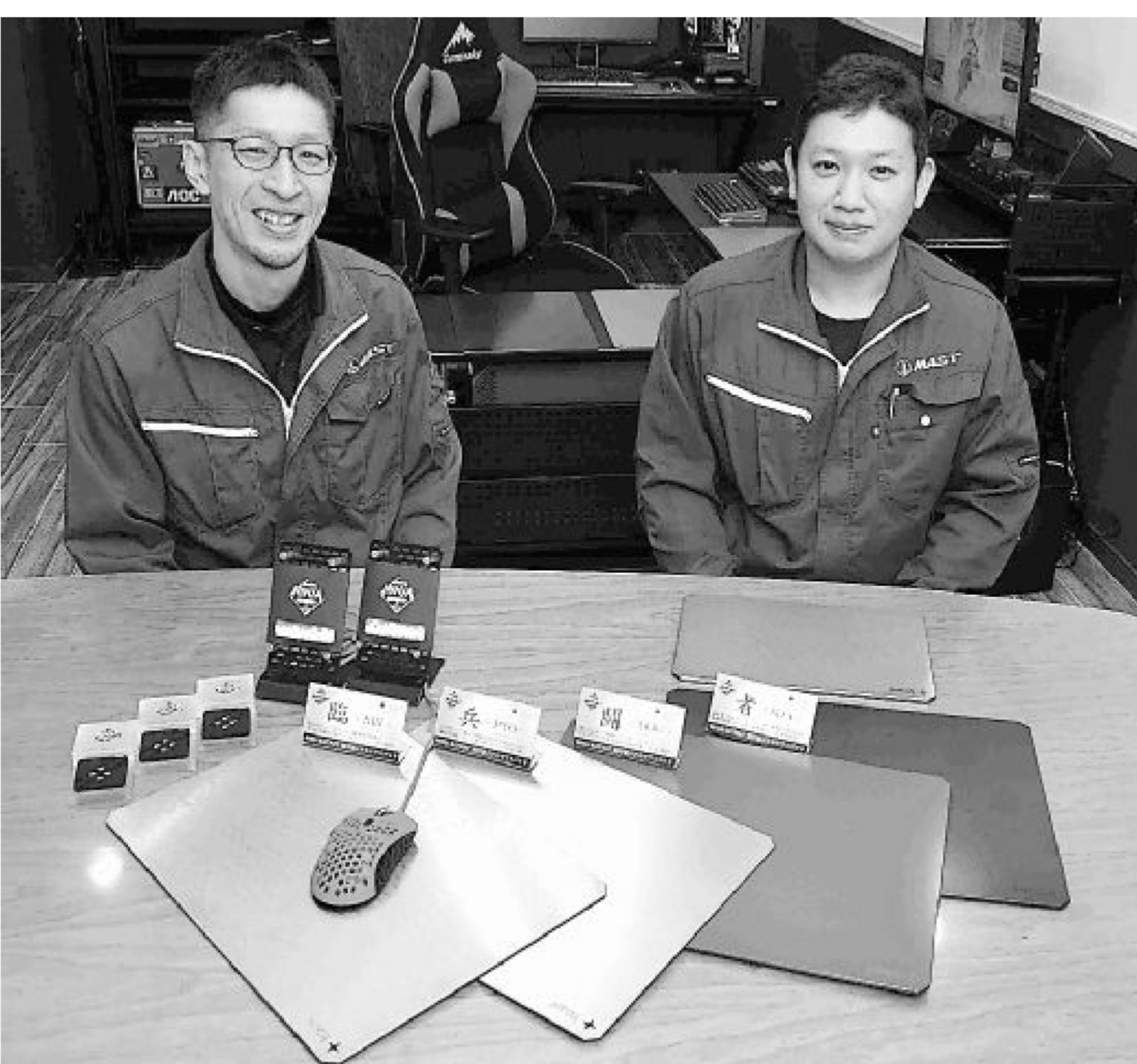


元気のひけつ

eスポーツの強い味方に

竹内型材研究所・金属製マウスパッド



メタルマウスパッド「NINJA RATMAT」などと、永広知史さん（右）、掛布洋平さん=伊勢原市鈴川

伊勢原市の「竹内型材研究所」が作る金属製マウスパッドは、一枚30センチ×40センチ、重いもので3キロもある。価格も6万円～8万円台（税別）と高価だが、これまでに300枚以上が売れた。何が評価されているのか。

同社はもともと電子部品用の精密金型部品メーカーで、金属の熱処理や平面研削が得意分野だ。ロボット、工具、金型などその用途は幅広い。部品同士がこすれ続ける過酷な条件で、接触部分や可動部分をいかに滑らかに動かすか。その技術が売りだ。ただ、得意先は専ら業者で、一般消費者向けの製品はなかった。「作った部品が最終的に何

になっているのか、社員でもわからないことが多い」と、マーケティングのチームリーダー永広知史さん（35）。「何をしている会社なのか。家族にも説明するのが難しかった」という。優れた技術をもつと知つて欲しいと、一般向

けの商品開発を思い立った。2018年、7人でプロジェクトを立ち上げた。まず口

込んで金属製のマウスパッドを作つてみた。

「これだ」と直感した。「必要な人に、必要なものを、必要な分だけ売ればいい。ニッヂだが、この会社の元々のやり方だ」

マウスパッドは滑りやすくともに、動きを止めたいときにはピタッと止められる性質も求められる。「滑り性」と「止まり性」に差を付けた4種類のメタルマウスパッドを、eスポーツで使ってもらおうと19年9月に東京ゲームショウに出演すると、行列ができる。

「これすごい」という声を聞いて良い物ができたと実感できた。翌月、4種類を発売。世界市場を意識して、ブランド名は「NINJA RAT MAT」にした。マウスではなくRATとしたのは、「ブルーカラーの泥臭さ」を表現

た時だ。ヘッドホンをした若くつろいでテレビを見ていた時だ。ヘッドホンをした若機能性をPRできず、壁にぶつかった。

「これだ」と直感した。「必要な人に、必要なものを、必要な分だけ売ればいい。ニッヂだが、この会社の元々のやり方だ」

「これすごい」という声を聞いて良い物ができたと実感できた。翌月、4種類を発売。世界市場を意識して、ブランド名は「NINJA RAT MAT」にした。マウスではなくRATとしたのは、「ブルーカラーの泥臭さ」を表現

したからだ。忍者の呪法「九字護身法」から製品は「臨」「兵」「闘」「者」と名付けた。

特注の平面研削盤で生産している。プロジェクトの一員でオペレーターの掛布洋平さん（35）によると、熱処理の後、一枚平均8時間ほど研削して平面度を高めている。

マウスの裏に貼り付けて、布のマウスパッドでも滑りを良くする「メタルマウスソール」も売り上げを伸ばしつつある。

「地元の伊勢原で、eスポーツのイベントができたら」。永広さんはコロナ後に向けて夢を広げている。（豊平森）

株式会社竹内型材研究所 1975年設立。昨年10月、予約制ショールームを併設した開発拠点「NINJA RATMAT R&D Lab」を開設した。チタンやセラミックなど、加工が難しい高機能素材の研削にも取り組んでいる。本社・工場、伊勢原市鈴川6。従業員26人。電話0463・93・7771。「NINJA RATMAT」は受注生産。詳細は公式サイト(<https://ninja-ratmat.jp/>)で。